

第三十四回村落社会研究会

特別報告

島根大学 永田 恵十郎

過疎村落の明暗

— 島根県旭町S集落の場合 —

一、過疎山村の社会的病理現象

対象を激疎地域に属する島根県旭町S集落において、問題を考えてみたい(図1を参照)。

S村落52戸の悉皆調査から得た知見によると、現段階の過疎の特徴は①50年代に入ってから的人口現象の緩慢化傾向、②同時に、その課程で高齢化が進行する一方、人口再生産能力をもつ年令層の減少も進行、③したがって、死亡者>出生者による自然減>社会減傾向の活性として整理できる。

この③の点は、今後の過疎山村の行方を考えるうえで重要な意味をもつ。そう遠くない時期に、さらなる世帯・人口減の確実な訪れが予測できるからである(地域社会再生産力のそう失による「過疎終末段階」の訪れ——社会的病理現象の深化)。「さきさき、どうしたらよいか思案中。养老院にいくのはいやだ」(62才の女性、単独世帯)、「先に死んだ者が果報だ」(58才の男性、妻はすでに死亡した単独世帯)等々の住民の声は、進行しつつある山村の社会的病理現象をリアルに教えてくれる。

二、水田+里山+山林の結合システムの崩壊と地域資源管理の粗放化

高度成長段階、したがって過疎化がはじまるのでS集落の農家は、中国地方山村がそうであったように米+和牛+木炭の3つを収入源の大黒柱としていた。これは水田+里山+山という中国地方山村の地形条件をいかした地目結合システムに照応したものであった(図2を参照)。やや、一般化したい方をすると、オランダからアルム

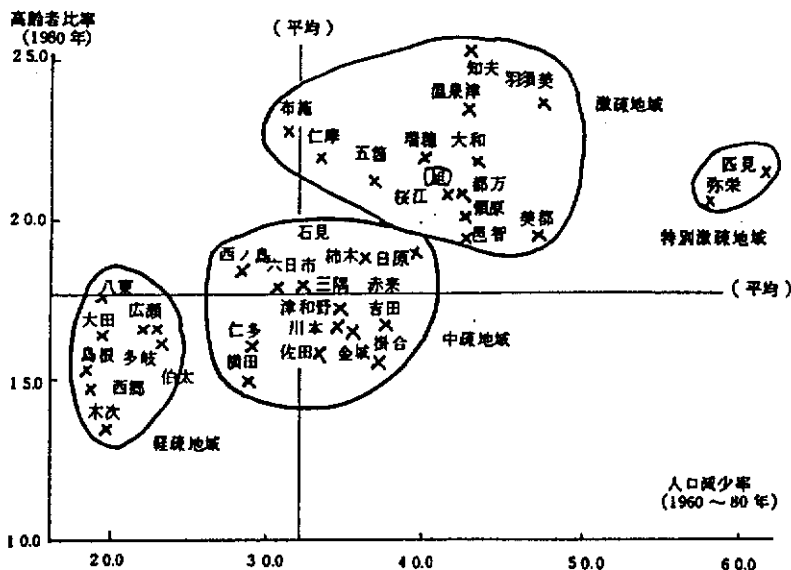


図1 人口減少率と高齢者比率による過疎地域類型区分(島根県)
『国勢調査』より作成。但し引用は、岩谷三四郎「過疎地域における農林業生産力体系」農業経済研究57巻2号。102頁

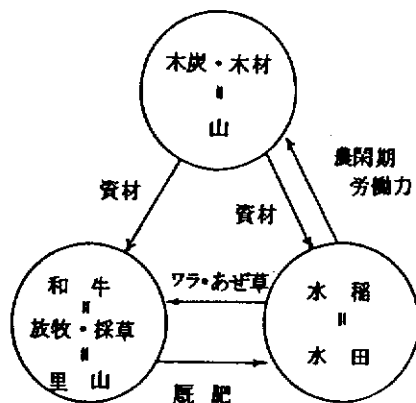


図2 S集落の伝統的生産システム (S30年代まで)

までとでもいふべき多様な地形条件を、当時の生産力レベルにそくして全面的に活用する地域資源の利用・管理システムが成立していたわけである。そして、このことによって年間を通じた生産と生活のリズム(＝農林業への年間就業体制)がうみだされていたのである。が、高度成長期の「近代化」の過程は、そういったシステムを完全に破壊した。その結果、地域資源の利用・管理は粗放化し、山村の伝統的な生産と生活のリズム、年間就業体制は崩壊した。「先に死んだ者は果報だ」という声、或は死亡者V出生産者傾向の発生という事実が凝集されている社会的病理現象を発生させた根因は、短期的な経済効率のみを追求してきた「近代化」にある、といつてよいだろう。

三、S集落をよくする会の活動

59年1月に結成されたこの会は、現在のS集落がもつ条件のもとで、地域資源利用の再活性化につながる活動を進めている点で注目

される。

この会の活動は、①畑ワサビづくり、②無人市場、③アマチャツルの栽培、④ふるさと産品づくり、⑤山しょうづくり等々にわたる多彩なものである。その特徴としては、婦人たちがおおくの場面で登場していること、老人労働になじみやすい作目がとりあげられていること、S集落の自然的個性に着目した地域資源利用の視点がつらぬかれていること等々を指摘することができる。

加えて、この会の生産活動は新年祝賀会、盆おどり、カラオケ大会、文化祭等の集落の社会活動と運動していることも注目される。過疎山村の暗の側面である社会的病理現象を克服し、すべての住民たちが「生きる喜び」を共有する方向を模索する新しい活動(明の側面)といつてよいだろう。

四、若干の展望

よくする会の活動が、これからいかなる展開を示すかについては、いま、にわかに明言することはむづかしいが、中国地方の過疎山村において、深刻化が予想される社会的病理現象を基本的に克服するポイントは、山村の農民が伝統的に培ってきた水田(平坦農地)と里山および山林の連鎖的・統一的な資源利用体系を、よくする会にみるような集団的活動をベースとしながら、しかも一段階上昇した生産力に依拠しながら再構成していくことである。

その場合、低地のオランダからスイスのアルムまでのような変化に富んだ地形と変化の激しい気候条件を、一つの村、一つの農家がかかえもちながら生産を営んできたところに、日本農業、とりわけ山村農業の特徴があったという歴史的個性の認識が重要になることは、いうまでもない。